

松本地区外国人留学生への方言指導を目指して

——学部留学生の松本平方言理解力——

上 條 厚

1 始めに

日本に在住する外国人留学生は、日常生活の中でいろいろな日本語に接しており、それは共通語ばかりでなく、方言も多い。本学に学ぶ外国人留学生も、この地域の方言に多少なりとも接している。かれらがどの程度方言に接しそれを理解しているか知ることは、意義のあることである。また外国人留学生は交流会やアルバイト等で、大学関係以外の地域の人たちと接する機会も多くある。そうしたときには、方言を聞くことも比較的多くなるであろう。かれらがそれぞれ学習する場所で、学生生活を円滑に行うためには、方言についてある程度知識があったほうがよい。この地域の生活語として使われている方言を、学生たちに対して指導することを検討すべきである。

方言に関する指導の検討は、本学の位置する全ての地域（松本・伊那・上田・長野）において行うべきことであるが、特に松本については、新入学の学部1年生が学習する場所であるという点で重要性がある。松本平の方言を、かれらが入学して最初に接する方言として、取り立てて考えるべきである。

今回そうしたことを踏まえながら、松本在住の本学外国人留学生に対して、松本平方言に関する調査を行った。この調査の結果を、方言指導の方向性を考えるための足がかりにしたいと思う。

2 調査の概要

行った調査の概要について述べる。

2.1 調査の時期・対象

調査の時期は1997年10月であった。

調査の対象とした外国人留学生は、現在本学の共通教育センターで、筆者の日本語・日本事情の授業を受けている、1997年度入学の学部1年生（研究生1名を含む）、および以前に教養部、後には共通教育センターで筆者の同授業を受け、現在松本の学部に通う1994年度～1996年度入学の学部生である。皆、松本に住んでいる人たちである。

本学学生の日本語能力は高水準から低水準までであるが、方言指導をしようとする場合、それを必要とするのは日本語能力が高い方の人たちである。日本語能力が低い人たちの場合は、方言よりも共通語の指導の方が必要である。学部生は日本語能力の点で、一般的に大学院生よりも高い能力を持っている。学部生は共通教育センターおよび学部において、日本語で行われる授業を受講できるだけの日本語能力が必要だからである。そこで方言についても学部生への指導をまず視点に置き、調査の対象も学部生とした。また学部生は、研究生等が入学

時期が一定していないのと違い、各年度毎、皆4月に入学し、その後続けて松本に住んでいる人たちである。したがって同一年度入学の学部生は、入学以前から松本に住んでいる人を除けば、松本在住の期間が同じである。松本平方言に接する期間も同じになるわけであり、その点調査の対象として好条件である。

2.2 調査の方法・内容

調査のやり方は、調査票を学生に渡して、各自に記入してもらった方法を使った。

調査票に記載した文を挙げると、下記の左側部分である。これらの文は下線部分のみに方言が現れるように作ってある。この下線部分が調査の対象となる。これらの内、⑤⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑳ は語彙に関する調査であり、それ以外は文法に関するものである。文法の調査対象となる事項については右側に記した。また [] 内は下線部分の共通語訳（解答）である。（⑪と⑳ は不掲載。後述）

- | | |
|-------------------------------------|-----------------------------|
| ①あんだ、 <u>信大生かい</u> 。 | ～かい
[信大生ですか。] |
| ②この菓子 <u>はうまいじ</u> 。 | ～じ
[うまいですよ。] |
| ③も <u>っと食べましょ</u> 。 | ～ましょ
[お召し上がりください。～食べなよ。] |
| ④あんだも <u>食べり</u> 。 | 五段動詞 -i 他の動詞 -ri
[食べなよ。] |
| ⑤ミカンを <u>くりや</u> 。 | [ください。] |
| ⑥このミカンは <u>うまいずら</u> 。
(うまいら) | ～ずら ～ら
[うまいでしょう。] |
| ⑦このミカンを買ったのは、あそこの <u>店せ</u> 。 | ～せ
[店ですよ。] |
| ⑧あそこでミカンを <u>売って</u> るだ。 | ～だ
[売っているんだ。] |
| ⑨それは、おれは <u>知ら</u> なんだね。 | ～なんだ
[知らなかった。] |
| ⑩9時にな <u>った</u> で、仕事を始める。 | ～で
[なったから。] |
| ⑫これは <u>運ば</u> なんで、あっちのを運ぶ。 | ～なんで
[運ばないで。] |
| ⑬これを全部向こうまで <u>運ば</u> なきゃいけね。 | ～なきゃいけね
[運ばなければいけない。] |
| ⑭電話を <u>かけ</u> っと思っていたら、お客が来た。 | ～っと
[かけようと。] |
| ⑮〇〇会社まで一人で <u>行</u> けるか。 | ～える
[行くことができる。(行く能力がある)] |
| ⑯ <u>そん</u> ねに辛いもの、よく食べるなあ。 | [そんなに。] |
| ⑰この箱にいくつ <u>へ</u> えるかな。 | [入る。] |
| ⑱そんなことをすると <u>み</u> ぐせえよ。
(みぐさい) | [みっともない。] |
| ⑳それをやるだけの <u>ず</u> くがねえ。
(ずくがない) | [がんばってしようとする気力がない。] |

これらの各項目に基づいて回答してもらった。まず回答者が、松本の人が_____の部分のような言い方をすることを聞いたことがあるかどうか、質問した。次に聞いたことがある場合には、意味が分かるかどうか質問し、分かる場合には意味を書いてもらった。

2.3 集計数と学生たちの言語背景

回収し、集計した調査票の数は、次のとおりである。回収した中で96年度と97年度に、指示どおりに答えていないものが若干あったが、それは集計から除外した。

1994年度入学	12
1995年度入学	15
1996年度入学	16
1997年度入学	23

集計した人たちの本学入学前の居住地は、3名が日本国外、他は日本国内である。日本国内の人たちは、2名が長野県内（4. 2. 3. で触れる）である外は、全て日本の首都圏である。長野県内および首都圏の人たちは、それぞれの日本語学校に、普通の人の場合1年～1年半通って日本語を勉強してから、本学に入学しているものである。

母語別に見ると、朝鮮語 [韓国] 8名、ベトナム語 [ベトナム] 4名、マレー語 [マレーシア] 2名、シンハリ語 [スリランカ] 1名、アラビア語 [エジプト] 1名、漢語 (諸方言含む) [中華人民共和国, 台湾, マカオ, 中華系マレーシア人] 50名である。母語に関することは後で触れる。また年齢は19歳～32歳 (1997年10月1日現在) である。

2.4 調査の参考

調査の参考のために、同じ調査を日本人の教育学部生にもしてもらった。その内訳は次のとおりである。

1994年度～1996年度入学 (現在長野に通学, 以前松本に1年間通学)

全体 22名。内, 県外出身 12名, 県内出身 10名。その内松本平出身 3名。

1997年度入学 (現在松本に通学)

全体 17名。内, 県外出身 9名, 県内出身 8名。その内松本平出身 2名。

調査票にはもともと、⑪あつ、荷物がおったぞ。[落ちた] ⑱疲れたから、足がままやくよ。[足がうまく動かない (ままやく=どもる)] が載せてあった。それに対する日本人学生の答えを見てみると、⑪は意味を誤解するものが多かった。また⑱は聞いたことがあるとするもの2名 (ともに県内出身, 内松本平出身1名), その内、意味を正しく答えた者1名 (松本平以外の出身) のみであった。このような状況であるため、⑪と⑱は調査に不適當であったと判断し、集計から除外する。

なお外国人留学生の結果と日本人学生の結果を比較することも、興味あることであるが、今回は行わない。

3 集計に際しての採点方法

以下に調査の結果を集計するが、集計に当たり、各項目毎、回答に点数を付けることにする。その採点方法は次の3とおりにする。

- I 聞いたことがあると答えたものを1点とする。
- II 聞いたことがあって、意味を正しく答えているものを1点とする。
- III 聞いたことがあって、意味を正しく答えているものを1点とする。聞いたことがあって、意味をある程度理解して答えているものを0.75点とする。聞いたことがあるとするだけのもの、および聞いたことがあるとして意味を答えてはいるが正しい答えてないものを、0.5点とする。

ここで、「聞いたことがある」「聞いたことがない」とする答えについて述べる。回答者たちは、「聞いたことがない」と答えている場合でも、実際には聞いている可能性がある。それは、聞いていてもそのことばを認識できないために、「聞いたことがない」としている場合である。そうであれば、「聞いたことがない」とする答えが、実際に聞いていないものなのか、それとも聞いてはいるが認識できていないだけなのか、区別ができないわけであり、それらを一つに扱うことには問題があることになる。また同様に「聞いたことがある」とする答えは、日本人と多く接するようになった結果、聞くようになったものなのか、あるいは方言に慣れた結果それを認識できるようになったものなのか、区別ができないわけである。このような問題を含んだものであるが、それを頭に入れつつも、上記のようにして集計することにする。

4 調査結果の考察1 <個人別集計>

調査結果の集計は、個人毎に合計点を出してから処理するものと、項目毎に全員の点数を集計して平均点を出すものと、2種類行う。まず個人別集計結果から見る。

4.1 個人別集計結果の平均と最上位・最下位

個人別に集計してから、年度別に全体・男女の平均を出したものは、以下に示すとおりである。年度毎の男女の個人別最上位・最下位も2名ずつ挙げる。I II IIIは採点方法を示す。満点はいずれも18点である。Iは、聞いたことがあるだけで1点となるから、点数はI～IIIの中で一番高くなる。IIは、意味を正しく答えないと点にならないから、一番低くなる。IIIはその中間となる。

1994年度入学

全体12名 男子6名 女子6名

	I	II	III
全体平均	11.75	8.08	10.44
男子平均	10.17	6.67	8.83
女子平均	13.33	9.50	12.04

1995年度入学

全体15名 男子9名 女子6名

	I	II	III
全体平均	10.20	7.67	9.23
男子平均	10.56	7.44	9.42
女子平均	9.67	8.00	8.96

個別集計 最上位・最下位

	男子			女子		
	I	II	III	I	II	III
A	12	11	11.75	a	17	13 15.5
B	12	7	10	b	15	10 13.5
.....						
C	7	6	6.75	c	11	9 10.25
D	8	4	6.5	d	10	7 9

個別集計 最上位・最下位

	男子			女子		
	I	II	III	I	II	III
A	14	13	13.75	a	13	11 12
B	16	10	13.5	b	11	10 10.5
.....						
C	7	3	5.5	c	8	7 7.75
D	7	2	5.25	d	6	3 4.75

1996年度入学

全体16名 男子6名 女子10名

	I	II	III
全体平均	9.00	6.06	7.88
男子平均	10.33	5.50	8.33
女子平均	8.20	6.40	7.60

1997年度入学

全体23名 男子10名 女子13名

	I	II	III
全体平均	6.70	4.17	5.72
男子平均	7.50	4.30	6.23
女子平均	6.08	4.08	5.33

個別集計 最上位・最下位

	男子			女子		
	I	II	III	I	II	III
A	15	11	13.5	a	12	10 11.25
B	11	8	10	b	11	7 9.8
.....						
C	6	4	5.25	c	6	5 5.75
D	10	0	5.25	d	5	4 4.5

個別集計 最上位・最下位

	男子			女子		
	I	II	III	I	II	III
A	12	8	10.25	a	11	9 10.25
B	11	8	9.75	b	11	9 10
.....						
C	4	2	3.25	c	2	1 1.5
D	3	0	1.5	d	1	1 1

4.2 結果に基づく分析

4.2.1 在住期間と点数

年度毎の全体平均を見ると、I II IIIとも年度が古いほど点数が高くなっている。入学した年度が古くて松本にいる期間が長い人たちほど、点数が高いということが、全体平均では言うことができる。ただし男女別平均では、94年度の男子は95年度の男子よりも、I II IIIの全てにおいて低くなっており、またIが96年度の男子より低くなっている。95年度の女子は、Iが96年度の男子より低くなっている。こうした点はあるものの、全体平均で見ると、年度が古いほど点数が上がるという結果である。学生たちは松本での生活が長いほど、方言に接する程度、また理解する程度が上がっているということが、示されていると言えよう。

4.2.2 男女差は言えるか

男女の差に関して見ると、同年度の比較で94年度以外については、男子の方が高い傾向にあるが、94年度の男子は同年度の女子に比べて、相当に低い結果となっている。この調査結果では、男女差に一般的傾向があるかどうか、見ることはできないであろう。結果の指摘に留めよう。

4.2.3 母語による違い

母語の違いについてみる。まず韓国人について。韓国人は94年度に1名いるが、それは中程度である。(中程度の上記の表には不出。また中程度以下の者で、個人名と点数が特定できるような記述は避ける。以下同じ)。95年度には2名いるが、その内1名は表のBであり、男子の最上位となっている。もう1名は中程度である。96年度は2名いるが、それは表のAとBであり、男子の最上位を占めている。97年度は3名、その内2名は表のAとBであり、もう1名は中程度である。このように韓国人には最上位の人が多く、そうでない人も中程度となっている。韓国人は一般に、日本語の修得が速いと言われている。それは朝鮮語の文構造が、日本語と似ているからだと言われている。また共有する漢字語が多いことも一因であろう。日本語の修得が速い人たちである韓国人は、方言の理解においても速いということが、この結果から言うことができよう。

次にベトナム人について。ベトナム人は全体で4名いるが、95年度のAはベトナム人であり最上位である。しかし他の3人のベトナム人が、高得点であるわけではない。95年度のAは突出しているものであって、母語の差とは関係ないであろう。

漢語話者について。94年度男子のA B、女子のa b、95年度女子のa b、96年度女子のa b、97年度女子のa b、は漢語話者である。これらの人たちは最上位であるが、漢語話者は高得点から低得点までいる。高得点を取っているのは個人差の結果であり、母語の差とは関係ないであろう。なお94年度のAは松本市の日本語学校修了、97年度のaは諏訪市(松本市から30km程度)の日本語学校修了であり、同一年度の人たちより松本ないしは長野県での在住期間が長い。それが高得点と結び付いていると想像できる。

4.2.4 年齢差はあるか

年齢差について論ずるためには資料が不十分である。ただし一つ指摘しておくならば、97年度では25歳以下の者が、高得点から低得点まで分布している。(詳細の資料は省略)したがって97年度の25歳以下については、年齢は点数と関係ないと言えるが、それ以外については、資料が不十分なので判断できない。

5 調査結果の考察2 <項目別集計>

5.1 項目別集計結果

次に項目別集計を見る。年度毎、①～⑳の項目別に、それぞれの点数を合計し、それを人数で割って平均点(以下、率と言う)を出した。それは次のとおりである。項目毎、最高は1.00となる。I II III全てが同じ率となっている項目は、聞いたことがあると答えた人が全て、同時に正しい意味を答えているものである。

文法に関する項目を先に挙げ、語彙に関する項目を後に挙げる。並べた順序は、5.2.1.1.1. 以下に項としてまとめた順であり、それぞれの項の中では、94年度のIIIの率が高い方から並べた。

	1994年度			1995年度			1996年度			1997年度		
	I	II	III	I	II	III	I	II	III	I	II	III
①信大生かい	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	1.00	0.94	0.94	0.94	0.87	0.83	0.86

⑬運ばなきゃいけね	0.83	0.75	0.79	1.00	1.00	1.00	0.88	0.88	0.88	0.83	0.83	0.83
⑫運ばなんで	0.83	0.83	0.83	0.87	0.80	0.83	0.69	0.69	0.69	0.39	0.35	0.37
⑩なったで	1.00	0.67	0.83	0.60	0.53	0.57	0.63	0.44	0.53	0.39	0.22	0.30
④食べり	0.67	0.58	0.63	0.60	0.60	0.60	0.56	0.50	0.53	0.26	0.26	0.26
⑭かけっと	0.67	0.42	0.58	0.60	0.53	0.57	0.56	0.50	0.53	0.26	0.22	0.25
⑧売ってるだ	0.92	0.50	0.79	0.67	0.47	0.62	0.56	0.19	0.45	0.57	0.22	0.43
③食べましょ	0.75	0.50	0.63	0.60	0.27	0.43	0.63	0.19	0.41	0.43	0.09	0.26
⑥うまいずら(うまいら)	0.75	0.25	0.56	0.40	0.20	0.32	0.50	0.19	0.38	0.33	0.13	0.22
⑨知らなんだ	0.83	0.00	0.63	0.87	0.07	0.65	0.69	0.00	0.50	0.74	0.04	0.57
⑦店せ	0.58	0.50	0.54	0.27	0.20	0.23	0.19	0.13	0.16	0.09	0.04	0.07
⑮行けえる	0.50	0.50	0.50	0.60	0.53	0.57	0.44	0.38	0.41	0.22	0.13	0.18
②うまいじ	0.50	0.00	0.38	0.40	0.07	0.28	0.50	0.06	0.34	0.04	0.00	0.03
⑯そんねに	0.75	0.75	0.75	0.60	0.60	0.60	0.63	0.56	0.59	0.46	0.43	0.46
⑤くりや	0.50	0.42	0.46	0.60	0.40	0.50	0.38	0.31	0.34	0.43	0.22	0.34
⑰へえる	0.33	0.33	0.33	0.27	0.27	0.27	0.13	0.06	0.09	0.13	0.09	0.12
⑲みぐせえ(みぐさい)	0.17	0.08	0.13	0.07	0.00	0.03	0.13	0.06	0.09	0.17	0.09	0.13
⑳ずくがねえ(ずくがない)	0.17	0.00	0.08	0.20	0.13	0.17	0.00	0.00	0.00	0.09	0.00	0.04

5.2 結果に基づく分析

これを見てまず言えることは、全体的に年度が古いほど高率になっていることであり、①と⑬については、1997年度（1年生）から高率になっていることである。①⑬については後で述べるが、それ以外のものは、松本において生活する期間が長い人たちほどそれらに接する機会が多く、それで高率の結果となっている、と行うことができよう。

5.2.1 文法項目

まず文法に関する項目について見るが、それを以下のように分ける。ただし分け方は相対的なものである。

5.2.1.1 全ての年度で、I II III全てが高率のもの ①⑬

①～かい と、⑬～なきゃいけね は、4つの年度全てで高率となっている。それは①と⑬が首都圏を始めとした広い地域でも聞かれる言い方、もしくはそれに近いものだからであろう。①は首都圏では語感が少し違うものの、同じ言い方がよくされるようである。⑬は首都圏では、「～なきゃいけねえ」のように伸ばして言うことが多いように思うが、近い言い方である。このためにこれらは、理解しやすいのであろう。1年生から高率となっている。

5.2.1.2 比較的高率で、I II IIIの率が同一年度内であまり変わらないもの ⑫⑩④⑭

⑫～なんで ⑩～で ④-i-ri ⑭～っと は首都圏では聞かれず、松本ではよく聞かれるものである。そのために、松本に住む期間が長いほど高率となっているわけであろう。またこれらは皆、前後の文脈により理解がしやすいものであり、そのために高率となっていると想像できる。これらの中で④⑭よりも⑫⑩の方が高率である。それは使われている頻度の違いの反映であろうか。

5.2.1.3 全体的には比較的高率だが、Ⅱの率が相当低いもの ⑧③⑥

⑧～だ は、ほとんどの述語に後接し、共通語の「～のだ」に相当するものである。96年度と97年度ではⅡがⅠⅢより相当低くなっている。Ⅱが低いということは、聞いたことがあるとする人の中で、意味を正しく答えている人が少ないということである。調査票に解答された答えの正答の基準をどうするかによっても、点数は変わるのであるが、低い率となっていることは注意すべきである。聞いてはいるが意味を正しく理解していない人が、96年度と97年度に多いことは、松本で生活する期間の短い人たちが、まだよく理解できていないことを示している。

③～ましょ も同様のことが言えるが、これは95年度においてもⅡが低くなっている。～ましょ は共通語の「～ましよう」と形が似ており、また外国人には長音と短音の区別ができない、もしくは難しいことが多いため、混同しやすいものである。また比較的多くの場面で、～ましょ と「～ましよう」のどちらに理解しても差し障りがない場合があることも、間違えやすい原因であろう。なお、～ましょ について述べておけば、これは30年程度以前には、最高尊敬のみで用いられるものであったが、現在では、最高尊敬という高い段階から、わずかの丁寧さを伴っただけの低い段階まで、広い範囲で用いられている。

⑥～ずら ～ら は、94年度においてもⅡが相当に低い。意味が理解しにくいものであろうか。これは⑧③と違い、共通語には類似した形が何もないために、理解が難しいということもあろうか。

5.2.1.4 全体的には比較的高率だが、Ⅱの率が極端に低いもの ⑨

⑨～なんだ はⅡが極端に低い。この正答は「知らなかった」である。正答であったのは95年度1名、97年度1名のみである。ちなみにそれはシンハリ語話者とマレー語話者。この項目を解答した人たちの内、全体で34名が「知らない」等（同じ意味の他の表現を含む）、13名が「知らないんだ」等（同じ意味の他の表現を含む）としていた。このように間違えている人が非常に多いため、Ⅱが極端に低くなっているのである。これは、「～ないんだ」と形が近いために、それと同様のものだとして誤解しているのであろうか。

間違いの原因追求はしばらくおき、正答率が極端に低いことは重視して考えなければならぬ。方言指導をするに当たっては、このように間違えて理解されるものがあることを、特に注意すべきである。前項の⑧③⑥もⅡの率が低く、同様に注意が必要である。どういうものに間違えやすい傾向が強いのか、考慮した上で方言の指導をすべきである。

5.2.1.5 比較的低率のもの ⑦⑮②

⑦～せ は、年度が古くなるにしたがって極端に上昇している。それは驚くほどであるが、指摘に留めざる。⑮～える については、行ける に対する「行ける」のように、長音と短音の区別が意味の違いとなるものであり、その点前述のように、外国人にとって難しい面がある。しかし聞き分けられる人は、きちんと聞き分けて答えている。②～じ はⅡの率が極端に低い。この言い方の持っている丁寧さを、理解していない人がほとんどである。それは場面からの判断が難しいものでもある。

5.2.2 語彙項目

語彙に関する項目について見る。

⑩そんねに は高率である。共通語に類似の形があるために理解しやすいのであろう。⑤

くりや は高率ではないが、94年度だけについて見ると、比較的高率である。

⑰へえる は低率である。これは「ない」が「ねえ」となるのと同様の変化をしたものであるが、「ねえ」はよく使われていて、学生たちにも理解しやすいものであるから、へえる についてもその理解は容易だと思われる。低率であるのは使用頻度の反映であろう。

⑱みぐせえ（みぐさい） ⑳ずくがねえ（ずくがない） は極端に低率である。使われている頻度の反映であろう。またこれらを耳にしても、正しく理解することは大分難しいことであろう。余談であるが、⑱みぐせえ（みぐさい） について「ださい・だせえ」と解答した人が2名いる。確かに「ださい」と共通した意味を持っている。低率であっても、それを聞いて、意味を大体理解している人がいることを示す事例である。

これら語彙の項目では、高率から低率まで、際だった結果が出た。指導に当たっては、こうした使用頻度を考慮する必要がある。

6 終わりに

以上、調査の結果に基づいて述べた。同時に方言指導に当たって留意することにも少し触れた。

年度毎違いがあることは容易に予想できることであるが、数値をもってそれを明らかにすることができた。項目毎の率の違いも示し、またⅡの率がⅠⅢより非常に低い結果となっているものがあることも示した。この点は方言指導をするに当たって留意すべきことである。

実際に授業等で指導をするに当たっては、指導事項をよく検討する必要があるが、それはこれからの課題である。

外国人留学生たちが方言指導を望んでいるかどうか、検討すべきことであろうが、今回の調査をする中で、解答を早く知りたいという声、学生たちから多く寄せられた。方言を知りたい外国人留学生が多いことは間違いなく、その点からも指導は意義あることである。

参考文献

- 前田昭彦 1996 「長崎方言による共通語助詞ガの分析」
『長崎大学外国人留学生指導センター紀要』第4号
- 真田信治 1992 「方言の状況と日本語教育」『日本語教育』76号
- 田尻英三 1992 「日本語教師と方言」『日本語教育』76号
- 細川英雄 1992 「日本語教育と方言意識 —金沢市内日本語教育機関での調査から—」
『日本語教育』76号
- 渋谷勝己 1992 「社会言語学的に見た日本語学習者の方言能力」『日本語教育』76号
- ダニエル・ロング 1992 「日本語教育における「方言教育」の問題点」『日本語教育』76号
- エカ マレティヤノンシ 1992 「日本語教育における地域語教育のあり方に関する調査」
『日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集』広島大学留学生センター
- 上條 厚 1992 「留学生が大学内で聞く日本語 —日本語初級段階での教授項目検討のための調査報告—」『長崎大学留学生教育の理念と組織化について』長崎大学外国人留学生指導センター